

中泊町尾別の旧家宮越家のルーツは、北陸加賀国（石川県）と伝えられる。江戸時代前期金木組尾別村

に移住し、同後期には地域を代表する豪農として知られるようになった。明治維新後は、従来の農林業に加



宮越家離れ「涼み座敷の間」=2019（平成31・令和元）年・中泊博物館蔵

えて商業・金融業を拡張し、近代地主へと成長した。9代当主宮越正治は、18歳の時、栄村湊（現五所川原市）の名門平山家出身のイハ15歳と結婚した。イハは、平山家9代目雄太郎の五女であり、衆議院議員の平山為之助と貴族院議員の鳴海周次郎は実兄にあたる。1920（大正9）年、正治は33歳の誕生日を迎える夫人イハのために、瀟洒

るほか、3ヶ所の窓の装飾は、ステンドグラス作家小川三知に依頼した。三知は、狩野派の巨匠橋本雅邦に学んだ日本画の素養と、アメリカ留学で身に付けた高度なガラス技法を武器に、わが国のステンドグラスの基礎を築いた人物である。三知は正治と綿密な打合せを重ねながら、渾身の作品を生み出した。

風を感じさせる植物に、鋭さのある動物を対比させた三知ならではの作である。これらは、当時のデザイン潮流を意識しながらも、日本画の意匠を巧みに織込み、技巧的なガラス技術の粋が盛込まれていることも相まって、三知の最高傑作と評価されている。

大正浪漫かおる

宮越家離れと庭園

齋藤 淳

（中泊町博物館館長）

な離れ「詩夢庵」と、津軽特有の大石武学流庭園をアレンジした「静川園」を完成させた。

「詩夢庵」は、天井や壁、縁側や床の間に銘木や高級建材が惜しげもなく使用され、丁寧な仕上げが施されている。また、建具についても、襖絵は狩野山楽・岩佐又兵衛・狩野常信といった安土桃山〜江戸前期に活躍した絵師の作と伝えられ

庭木を借景としている。「円窓の間」には、「十三潟」の景観が浮かび上がる。三知が得意とする白砂青松の図案が円構図で表されるとともに、裏側にラファージ様式とよばれるガラスを重ねる高度な技法が用いられている。光が透過すると十三潟の水面にさざ波が寄せる三知の孤高の技が圧巻である。

「風呂場」窓には、カワヤナギにカワセミ、シヨウウブという水処を意識した図案が採用された。柔らかな

草木芽吹く初春、新緑滴る盛夏、草花燃ゆる錦秋、水墨画のような厳冬…、四季折々の景観を見せる宮越家離れ・庭園は、正治夫妻の理想郷そのものであった。百年間にわたって封印されてきた宮越家離れと庭園は、2020（令和2）年より限定公開が始まった。公開情報については、中泊町ホームページをご参照いただければ幸いである。

伊東京と青森 644号
東京青森県人会 2021年12月